

## 論文

# 水泳部としての水上安全法講習会への取り組みと 高専生の水難事故に対する意識調査 —平成27年度水難学会国際ワークショップへの参加を機に—

大湊 佳宏<sup>1</sup>・石丸 美穂<sup>2</sup>・大倉 真一希<sup>3</sup>・西木 航<sup>4</sup>・箭内 天依<sup>5</sup>・吉野 拓弥<sup>6</sup>

<sup>1</sup>一般教育科 (Liberal Arts-English, National Institute of Technology, Nagaoka College)

<sup>2</sup>環境都市工学科 (Department of Civil Engineering, National Institute of Technology, Nagaoka College)

<sup>3</sup>電子制御工学科 (Department of Electronic Control Engineering, National Institute of Technology, Nagaoka College)

<sup>4</sup>物質工学科 (Department of Materials Engineering, National Institute of Technology, Nagaoka College)

<sup>5</sup>電子制御工学科 (Department of Electronic Control Engineering, National Institute of Technology, Nagaoka College)

<sup>6</sup>機械工学科 (Department of Mechanical Engineering, National Institute of Technology, Nagaoka College)

An Analysis of the Students' Participation in the Water Rescue Training with  
Swimming Club Members as an Extracurricular Activity and Contribution to Society  
-Preparation for the Uitemate 2015: the Workshop on the Water Rescue  
and Survival Research in Penang, Malaysia-

Yoshihiro OMINATO<sup>1</sup>, Miho ISHIMARU<sup>2</sup>, Maiki OKURA<sup>3</sup>, Wataru NISHIKI<sup>4</sup>,  
Takae YANAI<sup>5</sup>, and Takuya YOSHINO<sup>6</sup>

### Abstract

Every year in May, as one of the extracurricular activities, our swimming team in National Institute of Technology, Nagaoka College (Nagaoka Kosen), has an opportunity to join the water rescue training program, which is organized by the Japanese Red Cross, at the Nagaoka University of Technology swimming pool. For the last seven years, since 2007, the members of the Nagaoka Kosen swimming team, especially the fourth year students, have participated in this program and learned various things from the basic first-aid treatment such as CPR and how to use AED properly to the basic practical skills to rescue victims out of a swimming pool. Needless to say, it is a great chance for our swimming club members to contribute their swimming skills and techniques earned from their swimming experience to the society, and also to realize that their swimming skills are not just sufficient for racing to compete with one another. This study focuses on what the participants of the water rescue training in 2015 learned from their training and how they felt about it. Some of the basic important ideas about the water rescue and survival are discussed. In addition, the five participants of the training this year obtained a chance to challenge to make a presentation about their water rescue training in Penang, Malaysia, in November 2015. In order to construct a presentation in Penang, the five participants of the water rescue training discussed and reflected their experiences, and also conducted a survey on the Nagaoka Kosen students ( $N=362$ ) to figure out how they react if they encounter a water incident, their consciousness about water accidents, and the relationship between the students' swimming ability and their knowledge about water rescue and survival.

The result of the survey is discussed and analyzed on this paper.

**Key Words** : *swimming, extracurricular activity, water rescue training, contribution to society*

## 1. はじめに

長岡高専の課外活動活動における運動部・文化部の活動は、本校学生便覧に「人間性を豊か」にし、かつ「責任感と独創性のある人格の形成」に役立つ活動と記されており、1年次からその加入を強く推奨している。部活動が教育活動の一環として教員集団内で共通認識をもち活動が行われているかについてはいささか疑問が残るが、教職員と学生が協力をし、前向きに取り組んでいる様子がうかがえる。昨今、本校の部活動の取り組みを見てみても、全国高専大会への出場や入賞、または、各種コンテストへの参加や入賞など、数多くの活躍が報告されている。横山の長岡高専における学生の部活動ニーズに対する調査では、「学校生活における部活動の位置づけとして」84.9%の学生が「とても重要」もしくは「どちらかと言えば重要」と回答している。さらには、「自主性」と「専門的指導」の両立の難しさを指摘すると同時に、本校の部活動入部後の支援体制に課題が残ることも指摘をしている<sup>1)</sup>。

また、高専機構が作成する高等専門学校モデルコアカリキュラムにおいて、一般教養などの基礎的能力における到達目標と分野別の専門的能力における到達目標とは別に、技術者が備えるべき分野横断的能力として態度・思考力(人間力)、主体性、自己管理能力、責任感、チームワーク力、リーダーシップ、倫理観、未来志向性、キャリアデザイン力の育成を掲げている。いわゆる、社会生活に必要な能力「ジェネリックスキル」である。高専の学生にとっては、彼らの卒業後の進学先や就職先で応用することができる、汎用性の高い(転移可能な)能力を身につけることが重要になってきているのだと思われる。吉原は、このジェネリックスキルは、学業成績で評価されるいわゆる「学力」の下支えになる能力であると指摘している<sup>2)</sup>。その他にも、山口大学は「YU-AP アニュアル・レポート 2014」において、大学内の正課教育と正課外教育の「共創」についての取り組みを紹介している<sup>3)</sup>。さらに、溝上も、学生の成長を、正課内・外の要因を範囲に含めて調査を行っており、「勉強タイプ」(平均勉強時間は平日 2.73h, 休日 4.47h)の学生で部活と学業を両立している学生ほど彼ら自身の「成長を実感して

いる」と報告している<sup>4)</sup>。もしかしたら、授業改革だけではなく、正課外の教育活動の効果が問われ始めているのかもしれない。

本校水泳部は、長岡高専の部活動の一つとして活動し、競泳というスポーツを通し、他者との関わり、社会性、人間性などについてもお互いに論じながら、全員がより良い方向に成長できる事を目標に日々努力を重ねている。本稿の1つ目の目的は、筆者(大湊)が水泳部顧問として取り組んできた、本校水泳部員の赤十字水上安全法救助員養成講習会への参加の取り組みについて取りまとめて紹介することである。

2つ目の目的は、水上安全法講習の内容や受講した5名の意識の変化について発表をするとともに、長岡高専生の水難事故に対する認識調査や、水泳競技力と水難事故に遭遇時の彼らの思考・行動の関係についてのアンケート調査(N=362)を行い、その結果について分析・考察しすることである。また、平成27年度の赤十字水上安全法講習会に参加した水泳部員5名は、水上安全法講習会受講における彼らの経験や意識の変化についてを、豊橋技術科学大学ペナン校(マレーシア)で開催される水難学会 Uitemate 2015 国際ワークショップで発表する予定である。

## 2. 水泳部の取り組みと水上安全法

### 2.1 水泳部の取り組み

本校の水泳部は、部員数は毎年約20~30名程度で活動している。競泳競技を中心に、校内のプール(夏季)と近隣の室内プール(冬季)を利用し、競技力向上に努めている。競泳競技専門の指導員(教員)が居らず、顧問と学生が案を出し合いながら、現在では、週6日間を練習に費やしている。年間10以上の記録会や大会に出場し、1~3年生は、新潟県高体連の主催する大会(県高校総体、北信越高校総体)などにも出場している。7月には関東信越地区高等専門学校体育大会(高専地区大会)に1~5年生の全員が参加しており、平成25年、26年、27年度の高専地区大会において、本校は総合優勝を成し遂げている。ただし、本校水泳部は競泳の競

技力の向上だけを目指しているのではなく、部員らと顧問の共通目標として人間力の向上も掲げて活動を行っている。後者の目標達成手段の一つとして、平成 19 年度に在籍した部員（4 年生）と共に、赤十字水上安全法救助員養成講習の受講を始めた。当時、見附市消防署の職員の方の強い後押しと、筆者のアメリカ赤十字 Lifeguarding 講習会への参加経験が最初の切っ掛けであった。

## 2. 2 赤十字水上安全法救助員養成講習

平成 27 年度の水安全法救助員養成講習会は、5 月 23 日（土）、24 日（日）、30 日（土）、31 日（日）の 4 日間、長岡技術科学大学のプール施設で満 18 歳以上のある一定の泳力をもった人を対象に開催された。本講習会は、毎年同じ時期に開催されている。通常 4 日間のプログラムで、大学生から一般の方まで 30 名程度の参加者が受講している。講習の指導員は齋藤秀俊氏を初め、地元の消防署の職員の方々など、ボランティアによって構成されている。水上安全法とは、「水に関わる活動中の安全を図る方法」<sup>5)</sup>と定義されており、講習内容は、救急基礎講習に始まり、一次救命処置（心肺蘇生法、AED の使用法、気道異物除去）の学科や実技を交えたものへと続いて行く。この過程を修了すると、いよいよ水上安全法救助員養成講習のスタートである。また、この講習はプールでの救助技術を学ぶ講習（水上安全法救助員養成講習Ⅰ）であり、この後には水上安全法救助員養成講習Ⅱ〔海での救助技術〕、指導員講習とつながっている。本校で取り扱う水上安全法救助員講習とは、プールでの水上安全法救助員養成講習Ⅰのことを意味する。

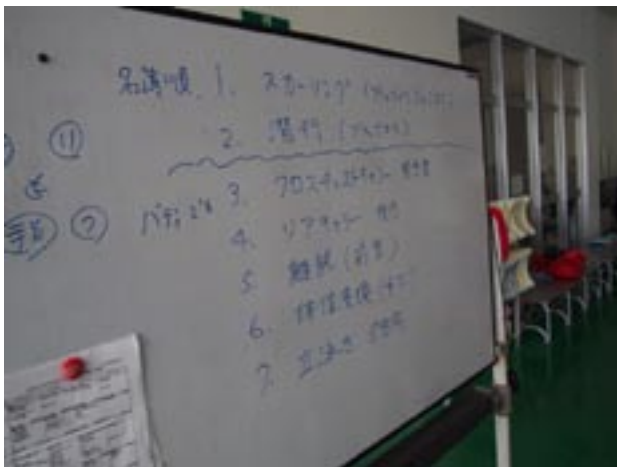


写真-1 水上安全法の訓練内容の一部



写真-2 溺者の運搬訓練の様子

プール内の実技講習では、泳ぎの基本と自己保全（入水、立ち泳ぎ、スカーリング、フィニング、あおり足など）、救助（アプローチ、防御の姿勢、あごの確保、溺者の運搬、離脱など）を繰り返し練習する。3 日目には、2 日目の内容に加えて、応急手当ての方法や泳がないで救助をする方法（ヒューマンチェーン、リングプイ、スローロープなど）を学習する。実技の中でも、4 種類ある溺者の運搬方法や、巻き足での数分間の立ち泳ぎは、競泳選手にとっても大変なトレーニングである。4 日目には、すでに学習した学科の内容と練習をした実技の総復習を行い、検定試験を受験し終了となる。この検定試験の結果を受け、後日、合格者には「赤十字救助法基礎講習終了」の認定証と「赤十字水上安全法救助員養成講習Ⅰ」の受講証が郵送される。毎日午前 9 時から 17 時までの講習なので、この時期に学校の実験レポートや前期中間試験が重なってしまう学生は、勉強と部活動を両立させる洗練されたタイムマネジメント力を要求される。

## 3. 受講者の感想と振り返り（平成 27 年度）

平成 27 年度には、5 名の本校水泳部員の 4 年生が本講習に参加をした（石丸、大倉、西木、箭内、吉野の 5 名）。講習会受講後に提出を依頼した振り返りにおいて、顧問が受講者に期待している回答は、「水泳の技術は、速さを競いあうためだけにあるのではないことが分かりました」なのだが、実際に受講者らが提出をした報告書の内容を整理すると、「2 次被害」「想像以上のつらさ」「浮いて待

て」の大切さ」の3点に集約することができた。

### 3. 1 2次被害

水難救助の際の2次被害とは、溺れている人を見たらまず自分が飛び込んで助けに行き、自らもおぼれてしまう現象で、水難救助の際に最もやってはいけない救助方法である。この考え方を徹底的に教えられ、受講者も「無暗に水に飛び込んだりしてはならない」「溺者を助けようとして、自分も溺者になってしまう、という事例が多い」「自分は救助法を学んだから、自分は水泳経験があるから、と慢心して勢いで救助に臨んでは、自分自身も溺者になってしまうだろう」と何度も繰り返し言われ、印象に残っていると報告している。

さらには、この知識について「自分自身知っているか知らないかで、自分(救助者)の命が助かるか助からないかが決定する場面がある」と報告する受講者もいた。講習を通して、「複数で」「陸上から」「器物を利用し」「泳がないで」などの救助は受講者にとって新しく、大切な知識となった。

### 3. 2 想像以上の辛さ

「競泳を(小さいときから)続けてきたため、全く問題なく(水中での)救助を行えると踏んでいた」と語る受講者は、水上安全法講習会終了後の振り返りで「(溺者の運搬)方法を学んだ際もその辛さに驚かされたが、着衣泳では、水難事故での死を身近に感じさせられた」と、その考え方を改めている。競泳経験者である彼らの「辛さ」とは、具体的には、プール内での溺者の運搬方法(キャリア)を指していた。講習内において溺者の運搬方法としてクロスチェストキャリア、ヘッドキャリア、ヘアキャリア、リアキャリアの4種類の運搬方法を習得する。溺者役の受講者を運搬することは、「水着でも(を着ていても)かなり厳しく自分が水に沈んでしまうこともあり」、競泳経験者の泳力をもってしても、体が沈み呼吸ができない状態になってしまう事への難しさを実感している様子であった。また、競泳経験者であるがために、逆に大変だった技能が、あおり足や逆あおり足の技術であった。特に平泳ぎの選手は、競泳競技においてキック動作があおり足にならないように指導される。それがゆえに、あおり足や逆あおり足の技術を求められる救助の際に、彼らはその技術の変換に戸惑っている様子であった。

### 3. 3 「浮いて待て」の大切さ

水難救助のプロフェッショナルが集まる水難学会の口頭発表では、救助する側(救助者)の技術に焦

点が集まることが多いらしいが、水難学会の斎藤秀俊氏は「溺者の側の技術」の大切さを説いており、松井・他も、斎藤氏らの水難学会は「水難事象における要救助者の浮標待機技能を重視」した“Uitemate”(浮いて待て)の啓蒙活動を実施している」と紹介している<sup>6)</sup>。

さらに、田村は、平成23年3月11日東日本大震災の大津波が、避難所の体育館に入ってくる状況で、「浮いて待て」を実際に実行でき救助された子どもたちについて言及しており<sup>7)</sup>、その大切さは、受講者からの振り返り内の「「浮いて待て」を知ることがなぜ大事なのか分かった」「自分の中に「浮いて待つ」という選択肢を持つことが重要だと思った」などの声にあらわれた。2次被害の恐ろしさと合わせても、受講者らは「自分で助けるより助けを待つのが最善である」と身に染みて感じている様子であった。

## 4. 水難に関する意識調査

長岡高専において、どの程度の学生が水難救助について知識を持っており、正しい行動をとれるのか、また、それらと本校学生の水泳能力との関係について調査を行った。平成27年8月に、調査協力をを承諾していただいた1学年2クラス(92名)、2学年4クラス(156名)、4学年3クラス(114名)(N=362)を対象に、無記名式のアンケート形式により調査を実施した。筆者(大湊)が担当している英語の授業、並びに本校教員で協力をして下さった教員の授業において、調査日に出席し、かつ全ての質問項目に回答したものを分析対象とした。使用した質問項目と選択肢は以下の通りである。

質問A あなたは水面に(浮き輪など何もなしで)どのくらい長く浮いていられますか。  
・まったく浮いてられない ・30秒未満 ・30秒～1分 ・1分～3分 ・3分以上

質問B あなたはどのくらい長く泳げますか。  
・5m未満 ・25m位 ・50m位 ・100m位  
・1,000m以上 ・止められるまでずっと

質問C 「泳ぎに行こうよ」と友達に誘われたら、真っ先に何を思い浮かべますか【複数回答可】  
・プール ・川 ・海 ・恐怖 ・池 ・湖 ・そ

の他

以下の質問に「はい」か「いいえ」のどちらかに○印を付けてお答えください。

質問1 過去に着衣泳の講習会を受けたことがありますか。

質問2 水難事故（水にまつわる事故）にありましたか。

質問3 泳力に自信がありますか。

質問4 家の近くなど、身近で水の事故が起こったことがありますか。

質問5 家の近くなど、身近で川もしくは海はありますか。

質問6 競泳をやっていた（スイミングに通っていた、もしくは通っている）。

質問7 水難事故（水にまつわる事故）にあってとき、助かる自信はありますか。

質問8 人がおぼれていたら、助けようと思いますか。

質問9 誰か（大人の人）がおぼれていたら、助けようと思いますか。

質問10 自分より小さい子どもがおぼれていたら、助けようと思いますか。

質問11 海に行くときおぼれる可能性を考えますか。

質問12 川に行くときおぼれる可能性を考えますか。

質問13 プールに行くときおぼれる可能性を考えますか。

質問14 釣りに行くことはありますか。

質問15 （場所は問いませんが）泳ぎに行くことはありますか。

質問16 おぼれている人の救助方法を習得したいと思いますか。

質問17 自分がおぼれてしまった時の対処方法を知っていますか。

※質問17で「はい」と答えた人は、おぼれた時に自分はどうのよう行動をとると思いますか。自由に書いてください。

質問18 周りで水辺の事故が起きた時の対処方法を知っていますか。

※質問18で「はい」と答えた人は、どのような水難事故対策・対処法を知っていますか。自由に書いてください。

質問19 水辺の事故に遭遇し、人を助けた経験がありますか。

※質問19で「はい」と答えた人は、どのような経験か教えて下さい。自由に書いて下さい。

## 5. アンケート結果

まずは質問A～Cの質問項目に注目してみると、水に3分以上浮いている自信がある学生が半数以上（55.0%）いることが分かる（表-1）。質問Bの泳げる距離に関しては泳力がある程度ある（1000m以上泳げる（17.7%）ないしは止められるまで泳ぎ続けられる（10.8%））ものから、まったく泳げない（5.0%）と回答するものまでばらつきがみられる。

「止められるまで」泳ぎ続けられると回答した学生が1割程度みられるのも特徴である。質問Cから、泳ぎに行く場所に関しては、大多数の学生が、プールないしは海に泳ぎに行くのを想像することが伺える。その他と回答したの8名の具体的な場所の記載

表-1 質問A～Cの回答結果

質問A	まったく	30秒未満	30秒～1分	1分～3分	3分以上			合計
	18	28	52	65	199			
		5.0%	7.7%	14.4%	18.0%	55.0%		
質問B	5m未満	25m位	50m位	100m位	1000m以上	止められるまで	合計	
	15	58	61	125	64	39		362
		4.1%	16.0%	16.9%	34.5%	17.7%	10.8%	100%
質問C	プール	川	海	恐怖	池	湖	その他	合計
	298	24	177	9	1	1	8	518
		57.5%	4.6%	34.2%	1.7%	0.2%	0.2%	1.5%

はなかった。

質問1～19までの結果を以下の表-2にまとめた。質問1の結果からも分かるように、過去に着衣泳の講習を受講した経験のある学生が71.3%いた。

質問2の「水難事故にあったことがあるか」とは、最近多発して起こっている自然災害の水害被害と混同する学生が多かったため、水の事故に巻き込まれた、もしくは溺れた経験があるかどうか、と言い換えて説明をし回答してもらった。いいえと答える学生の割合は93.9%であった。これと連動し、質問4で、身近な水の事故を経験している学生も少ない(14.9%)ようであった。

目の前で溺れている人に遭遇した場合、65.7%(質問8)が助けようと考え、溺者が大人の場合はそれが58.3%(質問9)に減少するが、小さな子供が目の前で溺れている場面では78.2%(質問10)に増加することが分かった。約8割である。

質問11～13は、泳ぎに行く際に自分自身が溺れることを考慮し行動を行うかどうかについて問う質問だったが、海や川に行く際は考慮する者が71.5%(海)と59.9%(川)いるが、プールの場合がこれが18.5%とかなり大きく減少することが分かった。

溺れている人を救助するための方法を知らない人(質問17:71.0%)や、自分がおぼれた時の助かるための対処方法を知らない人(質問18:87.8%)が多く、溺れている人を助けるための救助方法を習得したいと思っている学生は全体の71.5%いることが分かった。実際に救助に携わったことがある学生が1名(質問19:0.3%)だけ存在した。

## 6. アンケート考察

アンケートの調査結果をさらに深く考察すると、本校では新潟県全域から学生が集まってくるため、新潟県内の15歳～19歳の年代の生徒・学生に関しては、着衣泳経験が広く普及している様子が推測できる(質問1)。ただし、注意しなければならないのは、着衣泳の受講経験がある学生(71.3%:258人)の中で、水辺の事故にあったときの対処法を知っている(質問18)と回答したのはたった17.0%(44人)であったことである。比較的多くの学生が、着衣泳の講習内容を高専のこの年代で覚えていないと言う事である。要因をこの調査からだけでは断定することはできないが、稲垣他の報告はその要因を暗示している。稲垣他は、大学生(117名)

表-2 質問1～19の回答結果

質問	はい	いいえ	合計	はい(%)	いいえ(%)
質問1	258	104	362	71.3%	28.7%
質問2	22	340	362	6.1%	93.9%
質問3	140	222	362	38.7%	61.3%
質問4	54	308	362	14.9%	85.1%
質問5	268	96	362	73.5%	26.5%
質問6	222	140	362	61.3%	38.7%
質問7	108	254	362	29.8%	70.2%
質問8	238	124	362	65.7%	34.3%
質問9	211	151	362	58.3%	41.7%
質問10	283	79	362	78.2%	21.8%
質問11	259	103	362	71.5%	28.5%
質問12	217	145	362	59.9%	40.1%
質問13	67	295	362	18.5%	81.5%
質問14	130	232	362	35.9%	64.1%
質問15	183	179	362	50.6%	49.4%
質問16	259	103	362	71.5%	28.5%
質問17	105	257	362	29.0%	71.0%
質問18	44	318	362	12.2%	87.8%
質問19	1	361	362	0.3%	99.7%

を対象に小中高等学校の水泳歴や着衣泳などについての調査を行い行なった。調査対象の学生のうち、学校で水泳授業を受けたことがある児童・生徒の中で、学校の授業で着衣泳を経験した人数の割合は「小学校:43.1%」「中学校:6.9%」「高等学校:5.2%」であった<sup>8)</sup>。このことから、小学校における着衣泳の講習会は普及しているが、年齢が上がった中学・高等学校での実施の数が少ないことが分かる。繰り返し講習会を受け続けることや、高等学校の年代においても、着衣泳などの水中活動における安全講習を引き続き開催する重要性を示唆している。

水難事故にあったときに助かる自信がある(質問7)学生が29.8%しかいない中、実際に目の前で溺れている人がいたら助けようという学生が多く見られたことは危険であり、少なからず問題である(質問8:65.7%, 質問9:58.3%, 質問10:78.2%)。水泳に自信がある学生(質問B:1000m以上、または止められるまで泳げると回答した学生)のうち、約68%は質問7において「助けに行く」と回答して、同時に、それ以外の比較的泳ぎに自信がない学生(質問B:まったく泳げない～100m位と回答した学生)も同様に約58%が「助けに行く」と回答した。つまり、溺れている人を見た時に助けに行くかどうかは、彼らの水泳技術ではなく、彼らの救助に対する意識にも由来することが伺える。前章でも述べたとおり、競泳選手であっても水中にいる溺者を救助することは大変困難であり、泳力もなく人命を救助するという考え方はとても危険である。さらに提案したいのは、いざ救助の場面に出く

わたした時のために、泳力がある者でも、水上安全法の講習を受講することは大変有効であると言う事である。

水上安全法の有用性を示すデータがもう一つ存在する。平成 24 年度の東京消防庁の発表によると、平成 19 年から平成 23 年までの 6 月から 9 月に発生した「おぼれる」事故の発生場所は、河川が 57.1%、プールが 34.1%、海 2.2%と報告されている。しかし、警察庁生活安全局地域課の資料によると、平成 26 年死者・行方不明者の発生場所別の割合は、海が 47.4%、河川が 33.6%と続き、プールで発生率は 0.8%と大きく減少する<sup>10)</sup>。これは、プールでの事故では多くの場合がライフガード等に救出されていることが推測できる。質問 1 3 の結果から、プールでは溺れないと思っている人 (81.5%) が多いが、溺れる事故の 34.1%は 2 番目に多くプールで発生している事実から、やはり「浮いて待て」のコンセプトは、溺者になった場合を想定すると決して忘れてはならない考え方であると言えよう。

## 7. おわりに

本調査の限界として、調査対象は偶然長岡高専に在籍した学生を対象に、362 名のアンケートデータを分析したに過ぎず、広く一般化し理解するには慎重である必要がる。また、本校の 5 名水泳部の部員を競泳経験者と定義したが、競技力の多様性の面からみても競泳選手として一般化するには限界がある。しかし、一つのある傾向として現状を把握し、現在の本校における水難意識調査としては価値があるであろう。

さらに注目すべきは、自らの身を守る具体的な手段としての着衣泳 (浮いて待て) や人命救助のための水上安全法の講習に、水泳部員の 5 名が部活動の一環として主体的にかかわり実践し、そしてこの調査を構想・立案、データ収集、あるいはデータ分析などすべてに関わり、実行できたことに大きな意味を覚える。第 1 章でも述べたとおり、この調査は、マレーシアで開催される水難学会国際ワークショップ 2015 に向けての発表内容の一部であり、水泳部員の 5 名は豊橋技術科学大学ペナン校にて英語で発表する予定である。高専の一部の専攻科生や、大学院生が国際学会で英語の発表をすることはあるが、研究室配属前の学生が国際学会の発表の機会を得ることは、部活動の試みとしてはかなり珍しいはずである。本稿が、高専において部活動 (課外活動) が

教育活動の一環としての在り方を示唆し、新しい可能性を提案する一助となることを期待している。

**謝辞**：水上安全法救助員講習会において、様々なサポートや機会を与えていただいた齋藤秀俊氏 (長岡技術科学大学 教授) を始め、水上安全法への本校水泳部員の参加の切っ掛けを作っていただいた見附市消防署の知野靖弘氏、そして本校水泳部の活動を支援してくださっている長岡高専の教職員、並びに長岡高専水泳部OBの方々にこの場を借りて感謝申し上げます。

## 参考文献

- 1) 横山剛士：高等専門学校における学生の部活動ニーズに関する研究，長岡工業高等専門学校研究紀要，第47巻，pp.17-23，2011.
- 2) 吉原恵子：大学教育とジェネリックスキルの獲得 - ジェネリックスキルをめぐる各国の動向と課題 - ，兵庫大学論集，第12号，pp163-178，2007.
- 3) 山口大学：山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) アニュアルレポート2014，山口大学，2015.
- 4) 溝上慎一：生徒タイプの分析から見えてくる高校生の特徴，学校と社会をつなぐ調査 第1回調査 (2013年秋実施) 分析結果報告 - 1 時点目 (高校 2 年生) 報告書，京都大学高等教育研究推進センター，学校法人河合塾教育開発本部，pp.10-28，2014.
- 5) 日本赤十字社『水上安全法講習教本』，日赤会館，2007.
- 6) 松井敦典，南隆尚，野村照夫，合屋十四秋：水泳教育における着衣泳の普及と取扱いの展望，日本水泳・水中運動学会2014年次大会論文集，pp.46-49，2014.
- 7) 田村祐司：巻頭言東日本大震災に思う，着衣泳，第6巻第2号，p.1，2011.
- 8) 稲垣良介，岸俊之，本学学生の着衣泳 (水泳) 歴の実態と水泳指導の課題，福井大学教育実践研究，第36号，pp.23-33，2011.
- 9) 東京消防庁，報道発表資料，Retrieved September 30 2015, from [www.tfd.metro.tokyo.jp/hp-kouhouka/pdf/241016.pdf](http://www.tfd.metro.tokyo.jp/hp-kouhouka/pdf/241016.pdf)
- 10) 警察庁生活安全局地域課，平成26年中における水難の概況，Retrieved September 30, from [https://www.npa.go.jp/safetylife/chiiki/h26\\_suinan.pdf](https://www.npa.go.jp/safetylife/chiiki/h26_suinan.pdf)

(2015. 10. 3 受付)